



坊っちゃんの世界史像

小森陽一

いう、この書物全体と同じ標題だったの
で、裏を取られているのかもしれない
と緊張した。憲法政治講演会ではない、
文学の話をするときの初対面の方たちに
対して、私は「北海道大学教養学部から
文学部に移行するとき、本当は史学科西
洋史学科でロシア史を学びたかったの
に、成績が悪過ぎて、学部志望欄の最終
枠に記入した『国文科』に配属されて、
こうなってしまった」という告白をし
て、笑いをとってから本題に入っていた
からだ。

小学校時代を、在ブラハ・ソヴィエト
大使館付属八年生普通学校で過ごした私
の特技はロシア語だけ。ロシア語で受験
出来る国立大学は東京外国語大学と北海
道大学。両方受かったが、米原万里さん
(後にロシア語同時通訳者・作家)が外大
に通っていて、「陽ちゃんなんか来たら
殴り殺されるよ」とおどされて、北大
に行ったのだが、教養学部は「革マル
派」の拠点で、ピラとアジテーションと
タテカン画きの日々で、学部移行時の成
績は留年者の五人前。

卒論はロシア語を使って、二葉亭四迷

について書くしかありえなかった。それ
がめずらしいと評価されて大学院に進学
し、1982年に成城大学文芸学部就
職した。もう安全なものと、翌年「裏表
のある言葉——坊っちゃんにおける「語
り」の構造」という初めての漱石小説論
を発表した。この論文では「おれ」の一
人称の語りについて論じ、漱石研究者の
仲間に入った。

竹内氏の『坊っちゃん』分析の枠組
は、「坊っちゃん」の一人称が、語り手
かつ主人公的作中人物としては「おれ」
なのだが、小説内の「対面状況で、甘え
と遠慮がなかなばずるとき『僕』と言う」。
そして「余所行きでものをいうとき
『私』と言う」と分析している。見事な
理論的布置であり、小説の構造の要をお
さえた指摘である。

そして漱石が「近代小説の初期に一人
称を模索したとする第2章「一人称主人
公視点」では、自伝的小説『道草』から
未完に終る『明暗』の過程で、漱石が自
らの立場として主張した『自己本位』
を底辺社会に向かって拡張している」と
いう重要な指摘をしている。私などは小

雑誌『経済』誌上で、夏目漱石論の書
評をすることになるとは、おもいもよら
なかつた。編集部からのファックス(私
は今も手書き原稿を固定電話のファックス
でやり取りしている)に、著者竹内真澄
氏御本人から「評者としては小森先生に
お願いしたい」という依頼があったとの
こと。引き受けないわけにはいかない。
第1章が「坊っちゃんの世界史像」と

説表現の方法論を言語のレヴェルに限定
して論じたのだが、竹内氏は社会運動的
なよびかけにもつながる言語表現の可能
性を開いていく。
第3章「ビートルズ革命の世界史的意
味——レノンとマッカートニーの言葉と
行動——」から第11章「現代の個人」ま
で、「漱石」の二文字は出てこない。第
12章「漱石における賃労働の問題」は、
題名からしてマルクス主義者を挑発して
いるが、日本近代文学研究者となった私
にとっては、この章における竹内氏の読
み方は衝撃であった。すなわち「坊っ
ちゃん」以降、漱石の賃労働論の発展を
全作品の中に見出すことは容易であ
る」と真澄さんは言い切るのである。

教科書にも掲載されている『坊っちゃん』
と、映画にもなった『それから』、
そして生きるか死ぬかの瀬戸際で、新聞
連載小説執筆に復帰した『彼岸過迄』に
も竹内さんは「賃労働と資本」をめぐる
解釈を、漱石の小説だけでなく論説や評
論にまで拡張し、次のような衝撃的な言
葉を本書の読者に手渡ししていく。
漱石は搾取が経済的富に関わる問題

である以上に、自己が自己であろうと
することの妨害であると考えたのだ。
すなわち、搾取とは、何よりも人が我で
あろうとすることの否定であり、アイ
デンティティの根源を奪い去る「妨害」
そのものであると考えたのである。

この引用部の後に、ロシア革命の前
に、漱石がこの世を去ったので、「ソ連
問題」にかかわらなくて良かったという
指摘の後、「第13章 自己本位と則天去
私」に接続する。その意味で、この章の
「おわりに」で筆者が言う、「漱石は論吉
の階級観に抗する『自己本位の社会』の
到来をますます確信するのではなからう
か」という見解に私も心から賛同する。

『坊っちゃんの世界史像』という書物
における漱石についての叙述を分析して
いく中で、14章立てのこの本の大切な自
己主張に気づかされた。漱石で現代日本
を包囲するという文学的政治経済闘争の
方法だ。

この書物のほぼ真中に「第8章 都市
は笑う」というわずか4頁の文章があ
る。ここで笑福亭仁鶴のネタ「不動坊」
とのかわり得、漱石の『吾輩は猫であ

る』が、「江戸落語から影響を受け」と
いう従来の指摘に対し、「伝統芸能と近
代小説との出会いという見方を私は取ら
ない」と宣言する。そのすぐ後に「第9
章 寺島実郎の議員削減論に異議あり」
という編成となっている。ニュース解説
者としての寺島の言説を、「西洋では『
欧米では』』という『アメリカ出羽守』
と切って捨てるあたり、読みながら痛快
な感慨をいだかせていただいた。

同時代性を最も強く感じたのは、「第
3章 ビートルズ革命の世界史的意味」。
冒頭で「今頃になってぼつぼつビートル
ズを聴く」とあるが、私はブラハでビー
トルズ映画を観て、帰国後、武道館公演
で最後列の席で何も聴こえなかったこと
を自慢話にしている。だから「ビートル
ズは、一九六八年頃に音楽によって世界
を感性的に繋いだ」、それは「世界史的
な革命の序章であった」という言葉に全
身全霊で同意する。

同時代の同志の心おとる政論文学サ
ブカルチャー論をぜひ読んでください。

(本の泉社・定価「本体1430円+税」)
(こもり よういち・東京大学名誉教授)